

五 クロボトキン

ここでクロボトキンが登場する。ブルードンがまさに私有財産における不正な要素にたいし、「盗奪」としての財産にたいして闘いをはじめたとき——百年前に——生れたクロボトキンは、ブルードンの遺産を完成するためそれを意識的にとりあげる。その際は彼の遺産を単純化しているが、しかし部分的には実のり多い、また問題にとって有効な仕方で行っている。彼はもろもろの矛盾の光景を和げることによってブルードンを単純化しているが、これは短所である。しかしまた同時にブルードンを歴史的なもののなかに移し入れることによって単純化しているが、これは長所である。クロボトキンは決して歴史家ではない。彼は歴史的にものを考えるにしても社会地理学者であり、地球上の諸状態についての記述家である。しかし彼は歴史的な考えをとってはいる。

クロボトキンはまず第一に、多様な「社会的アンチノミー」の代りに、生存競争の原理と相互扶助の原理との簡単な対立を設定することによって、ブルードンを単純化する。彼はこれら原理の対立を生物学的、人類学および歴史的に立証しようと企てる。彼は歴史的に（たしか

に一八五二年のキレーエフスキー⁽⁶⁾に由来する史的二元論の説明に最も強く影響されて）、これらの原理が一方は国家の強制秩序に、他方はマルク共同体、自治体、ギルド、商工組合から現代の協同組合にいたる様々の結社形態に結晶したと見る。やはり誇張したまた歴史的な根拠も十分でない（一八九四年の）定式で、クロボトキンはこの対立を次のように語っている。「国家はすべての民族の生活において一定の時期に、徐々にすこしずつ、部族、共同体、部族連合、村落および生産者ギルドの自由な連合にとって代り、そして大衆を奴隷化するため少数者に恐るべき援助を与えたところの歴史的生成物である。——そしてこの歴史的生成物とそれから派生するすべてのものこそは、われわれが抗争するところのものである。」クロボトキンはのちの『近代科学とアナキズム』（実は『国家・その歴史的役割』）でより正しい、歴史的現実にもっと適合する定式を見出した。「われわれの文明の全歴史を通じ」と彼はいつている、「二つの相反する伝統、二つの傾向が互いに対立した。ローマの伝統と民衆の伝統、帝国の伝統と連合主義の伝統、強権主義の伝統と自由主義^{リベリズム}の伝統とである。そして両者は社会革命の前夜にも対抗する。」ここでは（たしかに二つの対立する原理を支配と自由組合と呼んだギールケの影響の下に）歴史的洞察に結びつけて、これら二つの精神的力の世界史的闘争が、社会運動の内部でもまた中央集権主義的社会主义と連合主義的社会主义との間にひきつづき行われていることが示唆されている。

確かにクロボトキンの国家概念は狭きに失している。中央集権的国家を国家一般と同一視することはできない。歴史上、小さな諸結社の固有のあり方を抑圧するかすかとしての国家だけが存在するのではない。さらにそれら結社がそのなかで結合する枠としての国家も存在するのである。ホッブスによればその権威が「恐怖」に基づく「大きなリヴァイアサン」だけでなく、なおその子供たる自治体を気づかいながら胸にかき抱く大きな養母も存在するし、自己に属するすべてを一つのメカニズムの機械的な構成要素に変える機械の諸機械だけでなく、さらにそのなかで「分肢的団体の固有かつ独立の共同生活」が發展しうる *communias communis* となすなら諸共同体の共同社会への結合も存在するのである。これに反してクロボトキンが現代の中央集権国家——彼はこれを誤って国家一般とよんでいる——の起源を十六世紀以後、すなわち、「自由都市の崩壊」が、「中世の村落共同体、職人組合、同胞組合、同盟というすべての自由契約の否定」によって完了した時期以後としたのは大体において正しい。「われわれは」とイギリスの法制史家メートランドは書いている、「中世末期に人間の集団化に関する人びとの考えに一大変化が行われたことを多少確実に語ることができる。」いまや「絶対的国家が絶対的個人に対立していた。」いまや、ギールケがいうように、「主権国家と主権個人とがそれぞれの自然的領域の限界について相争い、これにたいしてその中間の団体はすべて、たんに実定法的なまた多かれ少なかれ恣意的な構成体にまで押し下げられ、ついには一般

に押しつぶされた。」結局するところ、その技術化の程度に応じて、生きているすべてのものを食いつくす国家以外に何も残っていない。「緊密に集中化され、人知の最高の浪費を寓意し、配電盤の一握りで操作できる命令機構」(全体主義の多才な代弁者カール・シュミットはリヴァイアサンをこう名づける)に対しては、有機体的な何ものも対抗することができない。中央集権主義を擁護する一切の教説を論難せざるえない者には、個々人の安全——この目的のためにリヴァイアサンは不可欠と見なされる——ではなく共同社会的実質の維持、人類における共同体生活の更新が最も重要事である。教会史家フィッギスはいっている。「社会自体にたいしては一切の権力を否認しながら、国家という巨大な統一体には身体、魂および精神を支配する全く無制限な権能を与えるところの政治的原子論にもまして危険ないかなる迷信もない。国家は実際、ホッブスの著書の扉にあるように、ちっぽけな人びとからつくりあげた『大きなリヴァイアサン』である。だがわれわれはこの黄金の像を崇拜すべきいかなる理由をも知らない。」クロボトキンも、国家秩序一般ではなく、中央集権的国家装置と闘っている限りでは、科学のうちに強力な同盟者をもっている。たしかに科学の圏内では、かの「多元主義」にたいして、現代国家は、全体主義的ではなくして、多元主義的である限り、「社会のおよび経済的諸権力集団の妥協物、異質的諸要因、すなわち政党、利益団体、商社、労働組合、教会等々の塊り」のように見える(カール・シュミット)ということがいえる。だがそれでは、国家を諸々の共同体か

ら成る共同社会に変えるという社会主義的再建にたいして、その共同社会が真の共同社会であることが前提されている限り、反対すべきことを何も語られてはいない。なぜなら、シュミットがあげる種類の集団はすべて、社会主義化の暁には存在しないか、あるいは今とはちがったものであり、そして諸集団の結合は何らの塊りでもなく、ランダウアーの言葉でいえば「諸結合の連合」^{フオン・ヒンデ}となるであろうからである。そこになお強制秩序として存続するものは、たんにその時々における人間発達段階の指標でしかなく、もはや人間的未熟や人間的対立を利用するものではないであろう。個々人や諸集団の間の対立は、たしかに決してなくなならないであろうし、またなくなるべきでもあるまい。ただそれら対立は調整されなければならない。しかしわれわれは、個々の争が係り合いない大きな全体社会にまで拡大したり、あるいは中央集権的、無制限的支配の確立に利用されたりすることのない状態を目ざして努力することができるし、また努力しなければならないのである。

クロボトキンは、ブルードンがかえりみなかった多くの歴史的関連をとらえてはいるけれども、ときには過度の国家と適度の国家、ときには無用な国家と有用な国家との不十分な区別についてと同じく、他の重要な点においても、その洞察は現実主義的に十分ではない。あるときクロボトキンは、おそらく人は彼が中世のコミュニオンを讀美してその内部の闘争を忘れていることを非難するであろうが、しかし決してそうではないといっている。だが歴史は、「これら

闘争こそは自由都市における自由な生活の保証そのものであった」こと、共同社会はこれら闘争を通して成長し若返りしたことを示している。国家間の戦争とは反対にコミュニオンでは、「個人の自由の獲得と維持、連合の原理、団結し活動する権利についての争」であり、したがって「現存権威の重みが天秤皿の何れの側にもかけられることなく闘争が自由に行われた時代であり、人間精神の最も大きな発展の時代」であった。これは、本質的には正しいけれども、一つの決定的な点を十分にはとらえていない。集団的エゴイズムの危険は、分裂や抑圧の危険と同じく自治的共同体においても国家や政党にくらべてほとんど少くはないし、とくに共同体が協同組合として生産に関係するときはそうである。中世ドイツにおける「鉱山共同体」すなわち鉱山労働者の生産協同組合の内部的発展は、その雄弁な一例を示している。マックス・ウェーバーは、その鉱山共同体の発展の初期には、労働者による鉱山の占取および持主からの収奪がますます多く行われたこと、組合が経営管理者となり、平等の原則を可能な限り維持しながら利益を分配したこと、かしのちには労働者自体のなかに分化がはいりこみ、すなわち需要増加の結果として新しく来た人々とはもはや共同体のなかに受け入れられなくなり、彼らは「非組合員」、賃銀労働者であったこと、それとともににはじまった崩壊の過程が進み、最後には純然たる資本主義的な利害関係者が鉱山共同体の職員のなかに入りこみ、結局組合は労働者を雇用する資本主義的秩序の一機関となったことを、啓発的な叙述で説明した。今日（例えば

トニーの『利得社会』（一九二二年）において、労働者がどのようにして、自らの生産管理により、所有者を無用にするによって、所有者を工業企業から「凍結し出す」ことができるか、また労働者がどのようにして所有者を利潤の分前も責任もないたんなる利子生活者たらしめるほどにその利益を制限することができるかという提案を読むとき、これはまさに七百年前ドイツの鉱山業において行われたことであるが、その歴史的教訓は、われわれに身近なものとあり、社会再建に当って集团的利己心にたいする抑制策をめぐらすことに考慮を払うことをわれわれに要求するであろう。クロボトキンとても、この危険に盲目ではない。例えば、彼はあるとき（相互扶助論）一九〇二年、現代の協同組合運動が、その起源においては本質的に相互扶助の性格をもっていたのに、しばしば「株式資本的個人主義」に退化し、「協同組合利己心」を養っていることを指摘した。

クロボトキンは、すでにブルードンが示唆したことであるが、社会主義的自治共同体はコミューン間の二重の結合、すなわち様々に交錯し、相互に支持し合う地域的自治体の連合と職業的共同体の連合とを基礎としてのみ達成されることをより明確に理解した。——ときにはなお第三の原理として自発的所属による集団結成をつけ加えた。彼は新しい社会の姿をその自叙伝（一八九九年）の、バクーニンによって創立され、彼も一八七七年およびその後数年にわたってそこで活動した無政府共産主義的「ジュラ連合」の根本的見解について述べた個所で最も明確

に描いている。しかしジュラ連合の文書自体からは、これに類するいかなる説明もわれわれに知られていないことは確かである。かくて、バクーニンによつてはただ大ざっぱにしか考えられなかった思想が、年月の経過するうちにブルードンの思想と絡み合い、クロボトキンの精神においてこのように成熟したものと推定されよう。「われわれは」と彼は自叙伝に書いている、「文明諸国において、古い社会形態にとつて代るべき新しい社会形態の芽生えに気づいた。：この社会は、共同の努力を必要とするすべての物事のために互いに結合した多数の団体や組合、すなわちあらゆる種類の生産のための生産者の連合体、消費のための自治体、自治体相互の連合および自治体と生産者集団との連合、最後に一國全体または多くの国々にさえ亘り、また一定の地域に制限されないところの経済的、精神のおよび芸術的欲望を満すため共同で活動する人々から結成される一層広範囲な集団から構成されるであろう。これら集団のすべては相互的協定によつてその努力を一つにするであろう……個人的発意が奨励され、画一および集中化へのあらゆる傾向が防止されるであろう。その上、この社会は一定不動の形態に硬化することなく、不斷に変化して行くであろう。なぜなら、それは絶えず成長する生きた有機体であるからである。」いかなる均質化も認めない如くいかなる究極的固定化をも認めない——これがクロボトキンの健全な根本の感情である。彼のいうところによれば（一八九六年、達成に向つて努力すべきことは、「あらゆる部面における、あらゆる可能な度合における、考えうるす

べての目的のための自発的な結社、自らのうちに永続の諸要素を含み、またいかなる時にもすべての人々の多様な努力に最もよく対応する形態をとって絶えず変化して行くところの結社の最高度の発展と結び合った個性の最も完全な発達」である。さらに彼は一九一三年に補足してこう強調した。「われわれは社会の構造を、決して究極的なものとしては構成されえないものと考えている。」

このような社会構造は、民衆の社会のおよび政治的自発性をその時々可能な最高度に活動させることを意味する。クロボトキンが共産主義（ブルードンの攻撃した「すべての自由の否定」が横取りしているこの言葉で）と呼び、もっと正確には連合主義的コミュニケーション主義と特徴づけらるべきこの秩序は、「強制されることはできない。それは、すべての人々の不断の日常的な協力によって支持されないときは、存在することはありえないであろう。それは職権の寡聞気のなかでは窒息するであろう。より適確にはこの秩序は、あらゆる人々の間に幾千となく多くの共通の事柄のための永続的な接触が形成されない限り、存立することはできない。それは、横町、街区、地区、自治体等の最小単位に局地的な独立の生活を形成することなしには生きることはできない。」社会主義は「その固有の政治関係の形態を見出さなければならぬであろう。……社会主義はなんらかの仕方でもっと民衆のものとなり、議会政治よりもフォーラム（公会場）に近いものとならなければならないであろう。それは代表により少く依存し、自治

により多く依存しなければならないであろう。」ここでわれわれは、クロボトキンが攻撃しているのは結局国家秩序そのものではなく、現在のあらゆる形態の国家秩序だけであること、彼の「アナキー」はブルードンのそれと同じく実際は無支配であり、無政府ではなく無支配であることをとくにはっきり知るのである。「アナルシーとは」とブルードンは一八六四年ある手紙に書いた、「こういい表わすことが許されるなら、強権の原理、警察制度、拘束や抑圧の諸方策、官僚制、租税等々が最も単純な表現に縮減せしめられる統治形態もしくは政体である。」これが根本においてはまたクロボトキンの見解である。「より少い代表」および「より多くの自治」という重要な言葉が示すように、彼もまた、社会の構造的更新を真に求める意志をもって問題なのは、抽象的原理をあやつることではなく、ただ実現の方向であり、与えられた時々の状況にしたがってこの方向に達成される実現の限界線であって、この限界線こそは達成可能であるがゆえに、現在ここで要求されていることを示すものであることを知っている。彼はいかに大きな事柄が望まれており、しかもそれが心の奥底にいかに深く達しているかを知っている。すなわち、「個々人の間および集団の間のあらゆる関係が正されなければならない」ということである。しかしこのことは、社会的自発性がかき立てられ、それと同時にこの自発性に活動すべき方向がさし示されるときにのみ、達成されることをも彼は知っている。

社会秩序の決定的変革が革命なしに起りえないことは、クロボトキンにとって自明的である。

それはブルードンにとっても同様であった。ブルードンは——マルクスが、「プチブルジョア的」と攻撃した書物（『経済的要素』）でもすでに——彼が労働者階級にかけた重大な課題すなわち「資本と国家とを引きこみ、従わせるところの一層大きな権威、一層力強い事実を民衆の内部から、労働の奥底に出現させる」ことが、革命なしに果たされ得ないことをよく知っていた。

ブルードンは、一八四八年の革命に乾杯していったように、諸々の革命のうちに「人類における正義の相次ぐ表明」を見た。そして現代国家は彼にとって「その原理の本質からして反革命的」であった。しかし彼が（マルクスへの有名な手紙で）反論したのは、「襲撃なしには現在いかなる改革も不可能である」こと、またわれわれは「社会改革の手段として革命行動に訴えざるをえない」ことにたいしてであった。彼は革命の悲劇を予感していたし、期待に反する経験を重ねるにつれてそれをいよいよ深く感じた。革命の悲劇とは、その積極的な目標を基にして考察するならば、達成しようとするものが革命前すでにある度合にまで予め形成されており、したがって革命行動がたんにそれに十分な発展の場所を獲得するだけであるのではないときには、またその理由で、革命は、正に最も誠実な最も情熱的な革命家たちが持ちきたそうと望んだものとは正反対の結果になるということである。その死の二年前に痛ましくもブルードンはこう述べている。「われわれに中央集権化をもたらしたのは革命の闘争なのだ。」この認識はクロボトキンも知らなくはない。しかしクロボトキンは、革命が新しい「同様に有害な、も

しくは一層有害な」中央集権主義に終るのを防ぐためには、また革命において、「民衆——農民および都市労働者——自体が組織的な仕事をはじめ」ことを可能にするためには、革命の勢力に教育的に影響することで十分であると大体信じていた。「それ故共産主義を通して社会革命を開始することがわれわれの問題である」。クロボトキンはバクーニンと同じように、次の基本的事実、革命は、政治的領域におけるとは反対に社会的領域においては、なんら創造的な勢力でなく、むしろたんに解放的、救出的な、また助力的な勢力をもつこと、すなわち革命は、革命前の社会の胎内においてすでに予め形成されたものを仕上げし、自由にし、強力にし、完全なものにすることができただけであること、社会的生成について見れば、革命の時は受胎の時——これが予め行われるとして——ではなく、出産の時であることを見のがしている。

もちろんクロボトキンの教説のうちには、革命前の構造的建設の重要性を指示する本質的な諸要素も存在する。『相互扶助論』では、現代社会における旧来の共同体形態の残存と、これと並んで現代の多少とも無定形な連帯の実例とを示したように、『田園・工場および仕事場』（一八九八年増補版一九二二年）では、純粹に経済的および労働心理的前提から、旧社会のさ中において新しい社会を準備するための、細胞として役立つに適した新社会単位の像について重要な貢献をなしたのである。彼はここで、分業の原理のいよいよ甚だしい極端化、過度の専門化にたいして労働統合の原理、集約農業と分散化された工業との結合の原理を対置している。彼

は、田園と工場とを同時に基礎として建設され、そこでは同一人が交互に田園と工場とで働き、しかもそれがなら技術の退歩を意味せず、むしろ技術の発達と固く結びつきながら、人間が人間としての権利をもつにいたる農村の像を描いている。このような変改が現在の社会秩序では「完全には遂行」されえないことをクロボトキンを知っている。それにもかかわらず彼は單に明日のためだけではなく、なお今日のために計画する。「資本と労働との間の現在の關係を變更しようとする一切の社会主義的企圖は、もしそれが統合への傾向をかえり見ないならば、失敗に終るであらう」ことを彼は強調する。しかし彼はまた、願望する将来が「すでに可能で、すでに実現しうる」ことを力説する。そこから、社会の構造的更新を直ちに開始しようという要求へはほんの一步、もちろん決定的な一步でしかない。